第４回万葉文化館主宰共同研究「飛鳥からの発信―万葉古代学の地平―」研究概要報告

井上　さやか

はじめに

本共同研究は、研究代表者・寺川眞知夫万葉古代学研究所長のもと、平成２３年度・２４年度の２年に亘りおこなわれた。研究期間中に、万葉文化館の運営が奈良県万葉文化振興財団から奈良県へと移行し、それに伴う組織改編によって万葉古代学研究所主宰共同研究から万葉文化館主宰共同研究と位置付けられ、引き続き実施された。ここにその２年間の実施概要を報告する。

研究目的

万葉文化館が提唱する「万葉古代学」の基本理念のもとに、第１回・第２回・第３回の主宰共同研究を実施してきた。それぞれ、『万葉集』の三大部立に相当する、恋歌（相聞）・葬送儀礼（挽歌）・旅（雑歌）をテーマとして取り上げ、一定の成果をあげることができた（『万葉古代学研究所年報』第3・6・9号参照）。

万葉文化館が提唱する「万葉古代学」とは、『万葉集』を中心とした総合的古代学である。すなわち、文学・歴史学・民俗学・宗教学・考古学などの隣接諸科学が有機的に連携しつつ、その研究領域と方法を越えて『万葉集』を考究する試みであり、『万葉集』を広く古代文化の一環として位置付け、様々な角度から考察を加え、その総合的な価値を明らかにしようとするものである。

そこで、本共同研究では、これまでの主宰共同研究の成果を継承し、さらに発展させることを企図して、日本文化胎動の地である「飛鳥」をあらためて取り上げた。その目的は、現在問題視されている学問研究の細分化を克服し、「飛鳥」という土地に内包されるより本質的な問題に迫る、新たな視点と研究方法を提示することにあった。

実施概要

以下は、実施概要の簡略な報告である。詳細については、以降に掲載された各論を参照願いたい。

第１年次（平成２３年度）は、計６回の共同研究会を行った。

第１回研究会は、７月１８日（月・祝）に、万葉文化館共同研究室において実施した。参集した研究員の自己紹介の後、本共同研究の目的および期待される成果について確認し、今後の研究計画について話し合った。主たる共同研究員以外からも話を聞く必要があると判断され、ゲストスピーカーの候補者などが挙がった。館内および館周辺（酒船石遺跡・飛鳥古宮跡など）も視察した。

第２回研究会は、９月１日（木）に、万葉文化館共同研究室において実施した。竹本晃万葉古代学研究所主任研究員と井上から、文献史料および万葉歌などの基礎資料を配布し、説明と問題点の指摘がなされた。ことに、木簡資料の反映が喫緊の課題であることが確認された。その後、共同研究員で

ある犬飼公之氏（元宮城学院女子大学教授）が、比較文学の視点から「始祖・天武と明日香―日本と朝鮮」と題して報告し、質疑応答を行った。本共同研究に際して必要な資料（地図・その他）の購入についても検討した。

第３回研究会は、９月２日（金）に、万葉文化館共同研究室において実施した。ゲストとして、和田萃氏（京都教育大学名誉教授）を迎え、「明日香村の概要」についてレクチャーを受け、質疑応答を行った。その後、共同研究員である辰巳和弘氏（元同志社大学歴史資料館教授）が、考古学の視点から「百枝槻と古代王権」と題して報告し、質疑応答を行った。

第４回研究会は、平成２４年１月８日（日）に、万葉文化館共同研究室において実施した。共同研究員である高橋孝信氏（東京大学大学院教授）が、インド文学研究の視点から「詩作の場、発表の場―「声の文化」と「文字の文化」との関係で―」と題して報告し、質疑応答を行った。引き続き、ゲストとして亀田修一氏（岡山理科大学教授）を迎え、考古学研究の立場から「百済から飛鳥へ―考古資料を中心に―」についてレクチャーを受け、質疑応答を行った。

第５回研究会は、１月９日（月・祝）に、万葉文化館共同研究室において実施した。辰巳和弘氏（元同志社大学歴史資料館教授）が「古代王宮の景観論」と題して報告し、質疑応答を行った。さらに、ゲストとして、山本彰氏（大阪府教育委員会文化財保護課第一課長補佐）を迎え、「河内飛鳥の概要」についてレクチャーを受け、質疑応答を行った。

第６回研究会は、３月１１日（日）に、万葉文化館共同研究室において実施した。共同研究員である、阿部一氏（東洋学園大学教授）が「古代日本の歴代遷宮と家族システム―飛鳥の場所論序説―」と題して報告し、質疑応答を行った。さらに、前回のレクチャーを踏まえて、河内飛鳥の現地踏査も行った。

第２年次（平成２４年度）は、計６回の共同研究会を行った。

第７回研究会は、４月２２日（日）に、万葉文化館共同研究室において実施した。奈良県万葉文化振興財団の解散と運営主体の移行について報告し、本共同研究は引き続き実施することを確認し、協力を仰いだ。寺川眞知夫氏（同志社女子大学特任教授・元万葉古代学研究所長）が、「石と巨木の飛鳥」と題して報告し、質疑応答を行った。

第８回研究会は、５月６日（日）に、万葉文化館において実施した。同日開催の講演会に参加して、上野誠氏（奈良大学教授・元万葉古代学研究所副所長）「原罪と原恩―万葉びとの思惟から―」、寺川眞知夫氏（同志社女子大学特任教授・元万葉古代学研究所長）「嫉妬と嘆き―記紀万葉のイワノヒメ―」と題した講演をそれぞれ聴講し、その後会場を変えて質疑応答を行った。

第９回研究会は、７月１５日（日）に、明日香村内の実地踏査を実施した。昨年中に計画していたが、台風の影響により延期されていた踏査であった。これまでの研究会で問題となってきた場所を中心にコースを設定し、辰巳和弘氏（元同志社大学歴史資料館教授）が原案を作成、配布資料は小倉久美子万葉文化館主任技師が作成した。踏査地は、奈良文化財研究所藤原宮跡資料室、畝尾都多本神社・泣沢女神社、畝尾坐健土安神社、磐余池推定地、稚桜神社、芋ヶ峠、加夜奈留美命神社、飛鳥川上坐宇須多伎比賣命神社、南淵請安の墓、稲淵の飛び石、飛鳥稲淵宮殿跡、マラ石、坂田寺跡、であった。

第１０回研究会は、７月１６日（月・祝）に、万葉文化館共同研究室において実施した。小倉久美子万葉文化館主任技師が「歌銘にみる万葉歌の享受」と題して報告し、質疑応答を行った。その後、相原嘉之氏（明日香村教育委員会文化財課調整員）が「７世紀前半の飛鳥の景観」についてレクチャーし、質疑応答を行った。

第１１回研究会は、１０月７日（日）に、万葉文化館共同研究室において実施した。竹本晃万葉文化館主任研究員が「雷の丘の上にあるもの」と題して報告し、質疑応答を行った。その後、ゲストとして中西進氏（高志の国文学館長・万葉文化館名誉館長）を迎え、天武天皇の王権に関してレクチャーを受け、質疑応答を行った。

第１２回研究会は、平成２５年２月１７日（日）に、万葉文化館共同研究室において実施した。上野誠氏（奈良大学教授・元万葉古代学研究所副所長）が「故郷・飛鳥思慕の文学―天武皇統と『万葉集』―」と題して報告し、質疑応答を行った。続いて、井上が「近世の「古代飛鳥」像―『大和名處和歌集』から―」と題して報告し、質疑応答を行った。また、飛鳥資料館において開催中の「飛鳥の考古学」展を見学した。

研究成果

本共同研究では、万葉古代学の基本理念に基づいて、異なる国や地域の文化事象をも視野に入れつつ多方面から光を当てた「飛鳥」の学際的共同研究を行うことで、これまでにない視点と研究方法を提示し、『万葉集』が持つ普遍性と固有性を明らかにするとともに、世界の中で「飛鳥」を位置づけることを目的としてきた。

そこから期待された成果は、ひとつには現在問題視されている学問研究の細分化を克服し、新たな視点と研究方法を提示することが可能になることである。そしてもうひとつは、「飛鳥」をテーマとし、現代の明日香村という土地に内包される日本文化の真髄を、当地から情報発信することである。ローカルからグローバルへの情報発信を目指すことは、現代社会におけるより本質的な問題に迫ることにもなる。

当館では従来、個人研究と共同研究を核としつつ、一般向けの講座やセミナー等も積極的に実施している。これまでにも地元である明日香村や奈良県ならではの研究テーマを根本においてきたが、本共同研究ではより明確に「飛鳥」を取り上げることで、真の意味での「観光」への寄与を企図した。

「観光」とは、一般的には物見遊山を目的とする旅行のことを指すが、語源は『易経』の「国の光を観る。用て王に賓たるに利し。」との一節による。この「国の光」とは、「国の文化」にほかならない。本共同研究において、「飛鳥」という土地の持つ記憶や勢いといった土地の力を学際的に研究することで、そうした土地の力こそが、『易経』において「国の光」とされたものであり、それを観ることが「観光」の本義であると考えた。

奈良県は、日本文化揺籃の地であり、今も古代の息吹を温存した希有な土地柄を持つ。古代宮都が置かれた場所が点在し、古代史ファンなどの人々の憧憬を掻きたてる。ことに「飛鳥」の持つ土地の力は無尽蔵であるが、それでありながらその魅力が未だ十分に日本および世界に周知されておらず、「国の光」として存分に明らかにされ、生かされているとはいえないのではないか。

そうした現状を踏まえ、関係諸分野の研究成果を統合することで、「飛鳥」の「国の光」たる本来の文化的意義を明らかにし、それを日本のみならず世界の国や地域へ向けて情報発信する基礎資料作りも必要であると考えた。ただ単にわかりやすさを追究しマスメディアに迎合するだけでは、嘘や誤謬を喧伝することにもなりかねないが、学問的な研究成果をいかに有効に社会に還元するかという試みも、本共同研究の重要な成果の一つに位置付けられる。

たとえば、「法興寺」は、日本初の本格的な寺院として建設され、１４００年前に開眼したという仏像が今も鎮座することで知られる。約１００年後にそこに住んだ道昭が中国から請来した当時最新

の経典類は、やがて国家仏教の礎ともなった。また、寺の西に隣接していたという槻木広場は「乙巳の変」の重要な舞台であり、今は入鹿の首塚と伝承される象徴物が残る。中大兄皇子・中臣鎌足らが陣を構え、明日香川を挟んで蘇我氏と睨み合ったという場所も当寺である。この寺は「飛鳥寺」とも呼ばれ、飛鳥池工房遺跡から出土した７世紀後半の木簡にも記されている。通常の用字法では「飛鳥」とアスカの音は直結し得ないが、和歌において「飛ぶ鳥のアスカ」という修辞が定着したことにより、はじめて「飛鳥」はアスカと訓読されることが可能となったと考えられている。

「伝飛鳥板蓋宮跡」は、近年の考古学の成果によって、少なくとも３期に亘る宮殿建造物の跡が検出され、歴代の宮が営まれた地であることが確認された。『万葉集』からは、「飛鳥」が藤原京・平城京へ遷都した後も宮廷人たちにとって特別な場所であり続け、共通の故郷として認識され歌に表現されていたことも読み取ることができる。古代の人々の心の裡に鳥が飛び交うイメージで象徴された豊饒の地、歴代の天皇が政治を行った特別な場所が「飛鳥」であり、そうした文化を内包しているのが明日香村であるといえる。

このような「飛鳥」像は、歴史書や埋蔵物のみからは窺い知れない姿であり、今後も関係諸分野の研究成果を統合することで、さらに新たな研究展開が望まれる。

あわせて、国際的な視野に立った比較研究も有用である。一例として、環境地理学の見地からそれぞれの文化をはぐくんだ歴史ある場所を分析すれば、そこに土地の持つ記憶、土地の持つ勢いの普遍性を見いだすことが可能となる。

本共同研究では、そうした異なる国や地域の文化事象をも視野に入れつつ多方面から光を当てた「飛鳥」の学際的共同研究を行うことで、これまでにない視点と研究方法を提示し、『万葉集』が持つ普遍性と固有性を明らかにするとともに、世界の中で「飛鳥」を位置づけることを目指した。

２年間の研究成果として得られた「飛鳥」に関する知見や基礎データは、平成２５年１０月６日（日）に開催した公開シンポジウム「万葉古代学の飛鳥」において、またこの「万葉古代学研究年報　第１２号」掲載の各論を通じて、社会に還元する所存である。ゲスト報告者については全員からご寄稿いただけたわけではないが、古代の「飛鳥」に関して、基本となる古代文学・古代史学・考古学の成果だけでなく、環境学・インド文学・文化史学などからの視点も盛り込んでいる。詳細は掲載の各論をご参照願いたいが、国際比較や後世への影響などから多角的に「飛鳥」を捉えようとする試みとして位置付けている。

また、常勤研究員の日常の業務においても、本共同研究において得られた知見を活用し、今後の研究や講演活動などに反映させる予定である。あわせて、企画展示「公開シンポジウム「万葉古代学の飛鳥」関連展示」（会期：平成２５年１０月２日～１１月２４日）としても成果の一部を公表した。さらに今後は、一部を英語・中国語・韓国語などに翻訳し、館ＨＰなどで国内だけでなく世界に向けて公表することも目指している。

本共同研究の成果が、あらゆる側面でグローカルなあり方が模索されている現代社会において、偏狭な国粋主義に陥らず、普遍的な「土地の力」や「文化」の価値を見出す一助となることを願う。